ドキュメンタリー原稿（著作権ムラーラミュージックオフィス）

　　、幻の「チョコレートパティシエ」上川連（かみかわれん）

１９８１年、神奈川県に生まれる。

幼いころ、貧しい環境で育った上川が一番憂鬱だった時間・・・それは、幼少期ならだれもが楽しみなはずである「お楽しみ遠足」だ。

　上川は皆が持ってくるお母さんの手作り弁当や、おいしそうなお菓子を横目に見ながらいつも干し柿をほおばっていた。干し柿は遠足で歩いている間、長く日の当たる道を歩くとたちまち、包んでいた布に「べちゃ」っとした感触を残していたものである。

「うわっ」。周囲の子供たちは、上川をからかう。上川は本当にその時間が嫌でたまらなかったのである。

　時間は経過し、上川は中学生になる。上川は、将来への展望をあまり真剣に考えてはいなかった。なぜならば、自身の家庭が裕福ではなく、「高校へ進学する」という事でさえも、前向きに考えてよい物か、疑問を感じる位であったのだ。

　あるとき、ふと担任の三枝先生が、上川に近づく。「上川君は、手がとてもきれいだから何か料理人か、お菓子作りの人になったらどうかしら？」というのだ。

上川にとっては新鮮であり、そして不思議な感覚に見舞われた。

・・・「自分が料理人？」・・・ただし、ふと次の瞬間、あることを思い出すのである。幼少期、上川は、自分がなかなかお金で買ってもらえないケーキやチョコレートをいつも紙粘土で作っては、自分の机の上で眺めていたのである。

　気づいたら上川は奨学金を得て、パリへ渡っていた。上川はそこで、日本人の感性ならではの「扇子」や「まねきねこ」、はたまた「将棋の駒」などの独特な日本文化の象徴をかたどったチョコレートを試作していた。その後、その独特な感性で人気を博し、２００１年、パリコンセルジュバドワール洋菓子コンクールにて最優秀賞を受賞。時の人となる。

　　「何かを手に入れたくても、手に入らないときは、めいいっぱい想像しよう。イマジネーションがやがて、クリエイトになり、そしてそれは必ず人から必要とされるものとなるのだ」。

　　チョコレートパティシエ上川連